

## シベリアに抑留されて

愛媛県 岡崎 堅次郎

### 一、生い立ち

大正五（一九一六）年十一月十日、伊予郡上灘町（現在は双海町となつて、旧下灘村と合併している）に生まれた。当時のことで、男五人、女二人の七人兄弟姉妹家族であつた。

父の商売が珍しい。はぜの実から取つた黄色いロウを長浜町から送つてきて、長い竹で編んだロウ棚（晒場と言つていた。ずっと以前のことではつきりとは記憶がないが）に、縦一、二メートル位、横四十センチ位の浅い箱（ロウブタと言つていた）に、そのロウを入れて天日に干すのである。しかし晴天ばかりではないので、風が吹いたり雨の時は、素早く畳んで縛らないけない。兄弟のうちでちょうど私は四年生位だったように思うが、学校から帰つたら、「堅次郎、早く来

て手伝え」と父にしかめ面で厳命されると恐ろしいので、飛んで行って手伝つたことが未だに忘れられない。弟たち二人はまだ幼いので、手伝いをさせられたことは一度もなかった。

父の商売がそのように忙しいので、いつも晒場にいたのと、母が病気で一日じゅう寝ていたので、我々三人兄弟（次弟が三歳下、末弟が五歳下）で、遊ぶ時はいつも三人一緒に遊ぶのであるが、パッチンや独楽回しもすぐに飽きるので、他に遊びに行くところは鍛冶屋、散宿所（今で言う電気店）、退職教員の家と決めていた。

どこへ遊びに行っても快く受け入れてくれて、叱られたことはなかったが、一度だけ退職教員の家で何かまずいことでも言ったのか、「警察を呼ぶ」と言つて先生が電話をかけたので、飛んで出ていった。しかし、警察（駐在巡查）が来た様子はなかった。当時は自動車など通らないので、路上で遊んでも平気だった。タクシー会社等もなく、ちょうど筋向かいの家に人力車を引く商売の人（宮内といった）もいた。

どんどん成長して私も小学六年生になったが、子沢山で、生活は何とかできたが裕福ではなかった。それで、高等科一年で松山商業学校に入学した。しかし松山市に親戚等なく、民家に下宿するほどの余裕もなく、一年生のときは敷地内にある第一寄宿舎に入寮したが、それが大変だった。タチの悪い上級生、特に三年生がいて、「徹夜で勉強しろ」と言っていて、眠っていると回ってきて足にやいと（灸）をすえるのである。「熱くて手で落とすと倍に増えるぞ」と言っていて脅され、じっと辛抱したものである。この一年間は本当に長かった。

二年生になると、徒歩で五分位のところにある第二寄宿舎に移った。ここは入寮者は少人数で、部屋数も五部屋で、全員で十人位であったように思うが、食事の朝、昼、夕には、学校内の隅にある食堂へ食べに行くのである。先日この辺を歩いてみたら、その建物は残っていて、住民が住んでいた。三年生になると、また少し離れたところに第三寄宿舎があつて、隣に退役軍人の准尉が舎監として住んでいて、毎朝晩の点呼時に

は、部屋の前に整理して点呼を受けたものである。ここでは〇〇釣りと行って、眠っている下級生（二年生位だったように思う）の部屋にそつと入って、木綿糸でシンボルを静かに縛って遠くから魚を釣るように引く張ると、若い肉体のものが見事に興奮して勃起するのを見たり、イタズラをしたものである。

幸いにも三年生の途中で予讃線（国鉄）が上灘駅を通過するようになって、汽車通になった。当時、上灘駅から乗車する学生は、県中（現松山東校）、松商の生徒位で数人しか乗らず、郡中までは借り切りのようなものだった。

昭和十（一九三五）年三月十日、松商を卒業して大阪に就職した。

## 二、職歴

昭和十年三月十日、学校内に張り出された就職一覧表を見て、個人商店としては給料が割合に高く、大阪には実兄が就職して働いていたので、大阪市港区の個人商店（小林製釘所、工員が二十人ほどいて、毎日機械の音が絶えることはなかった）に就職した。事務職

員として他に二人いて、一人は事務長格で得意先の釘の販売量を割り当てる一年位先輩だった。もう一人は、年齢は小生と変わらない十八歳位で電話番号をしていた。私は得意先を自転車で集金に走ったのであるが、上灘の田舎から出てきて、あの繁華な大阪市内を自転車でもよくも集金できたと、いまだに忘れることはできない。時として交通取り締まりのポリにちよつとした違反で自転車を止められ、「そこでよく見ておけ」と叱られたこともあったが、悪いことばかりではない。日曜日は休みなので、市岡パラダイスのアイススケート場で、靴を借りて滑るのである。最初はヨチヨチ歩きだが、若いからすぐに滑れるようになって、バックもできるようになっていた。外で映画を見たり、コーヒー飲みに行ったりして、楽しい生活を送ることができた。時には兄のところに行つて遊んだりしたが、小生が背広の新調品を着込んで行くと、兄が、「何と良い背広を着て」と羨ましがっていた。後で聞いた話だが、事務職員の三人中一人は戦死し、一人は病死して、私一人だけが残つたようである。

### 三、軍隊

楽しかった一年九カ月間の大阪の生活であったが、二十歳になつて故郷の伊予市で徴兵検査を受け甲種合格となつて、昭和十二年一月十日、松山歩兵二十二連隊に入隊した。同年七月、日支事変のため中華民国中支方面の戦争に従軍し、翌十三年三月三十一日、戦況有利で部隊凱旋したが、再び同年七月、中支方面の警備に従事した。その当時、幸いにも主計下士官の試験があつて、志願者は小生一人であつたので合格して、翌十四年一月―三月、北京市で約百人ほどいたかどうか、二カ月間の教育を終えて主計伍長に任官した。そして無線第四三小隊、第二二軍経理部、電信第九連隊、第六三師団野戦病院、同師団病馬廠と部隊を転々と変つた。最後の病馬廠勤務の時に武装解除された。徒歩で長い時間行軍を強いられ、身につけていた装具類を一つまた一つと路上に捨てていったら、ロシア住民が残らず拾つて行つた。

そうして行つた先は、シベリアの山奥のポタルヴィーハというところで伐採（二抱えもあるような大

木の松を二人びきの鋸で切る）である。最初のうちは分厚いオーバーを着ていたが、労働で熱くなり、一枚と脱いで作業に従事した。温度は寒暖計がないからわからないが、零下二〇度位だったように思う。時としてロシア人が「ソーラク（四〇度）」と言っていたので、そんなに寒い日もあったようである。准尉は将校でないので作業をしたが、将校はテントの中で一日じゅう休んでいた。そのうちにロシア人が、「お前はハラシヨラポーター（真面目によく働く）」と言って、一人だけ大きな貨物車両で平地まで運んでくれた。そこでは自分たちが伐採した松の木を大きな貨車に積み込むのであるが、その貨車たるや、長さ二十メートル、高さ五メートル位ある。その両側にロープをつけてマイタマイタで引っ張るのであるが、幾ら積んでもいっぱいにならないのでヒートリー（ずるいこと）を考えついた。最初のうちは十文字に積んで、上部だけ真っすぐに積んだのである。私が貨車内で指揮していたとき、不測の貨車が引込線を通してロープを引きずったので貨車の端から端へ飛ばされ、危うく

命を落とすところだったが、足をぶつけただけで死は免れた。軍医が治療はしてくれたが、医薬品が赤ちゃん程度で、高度な治療（切開して縫う）ができず、右足スネの中央に大きな傷跡が残っており、これを見るたびに抑留中のことが思い出される。

そのうちに木の輸送も終わって作業がなくなり、タシケントという温暖な地で、干草を山積みにして集積する作業になった。その従事中に長かった三年間の労働を終えてダモイすることになった時は、夢心地であった。まさか帰れるとは思わなかったので、舞鶴港に入港した時は涙が出て止まらなくなったのを記憶している。

昭和十二年から二十三年までの十二年間、それは長い長い軍隊生活であった。弾丸の下、空腹。一年間位は着たきりで、シラミがシャツの縫目にギッシリついており、夜寝るとくだんのシラミが動き出して痒くて仕方かなかったけれども、骨と皮の瘦せた体で故郷、上灘へ帰れたのは幸いだった。

母は既に死んでいて、家には父だけが婆さんを雇っ

て暮らしていた。兄や姉弟二人は大阪や広島にいて、帰っては来たものの、明日からの生活を思うと気が気でなかった。しばらくは父と質素な生活を強いられしたが、警察事務官募集の広告を見て応募し、何とか合格して、昭和二十四年四月から四十五年三月までの二年間勤務した。同年五月から四十八年四月までの三年間、日本生命保険会社の外務員として勤務し、以後は伊予市老人クラブに入会し、上吾川老人クラブ会長を引き受けて二カ月に一回の市老連クラブの役員会に出席したり、上吾川役員会を開催して、市の行事、旅行等に参加している。